

三河の富永氏の研究

（若者よ、書を捨て、旅に出よう）

富永公文

目次

第1部 富永家の履歴	5
祖父と父と私	5
父の記 ―実録・富永雄一郎伝―	8
艦載機来襲す 〔母の戦争体験から〕	14
静岡県 of 風土	15
はじめに愛があつた	17
私のおいたち	18
小学校時代	19
中学校時代	20
郷土研究部の思い出	22
佐々木先生との出会い	23
N君のこと	24
高校時代	24
大学時代	25

紀行文　ブルガリア単独行　↳ソ連崩壊以前のブルガリアを訪れて↳	26
立命館大学で学んで	44
山口正之先生の思い出	46
第2部　歴史探訪	49
首なし富永	49
落人伝説　↳山国に住む人々↳	55
富永家の先祖・本家について	57
三河東部の郡について	60
富永氏のルーツと系譜	63
宇刈七騎と本庄山砦址	65
助高	67
三河富永氏の源流	69
東京の富永氏	82
あとがき	83

第1部 富永家の履歴

祖父と父と私

「人生五十年、下天のうちをくらぶれば、夢幻のごとくなり……。」（謡曲）「敦盛」そろそろ私も、来し方行く末を語ってもよい年頃となった。甘酸っぱい青春時代、落胆の教師時代、松下氏を追った壮年期、そして悠悠自適の現在。まだこれは、ほんの過渡期かもしれないが、清算しておく必要がある。

私の生地は現在の浜松市浜北区根堅（当時は浜名郡浜北町）、岩水寺の付近である。岩水寺の井戸から汲んだ水で産湯につかった。父は富永雄一郎、母はしげ（旧姓清水）、父方の祖父は貴久雄、祖母はひろ（旧姓長谷川）、である。

父は、北遠の山間の町、水窪町（現在の浜松市天竜区水窪町）の出身である。生家は奥領家大里（水窪本町）の商家であり、炭や椎茸を商っていた。戦前は浜松の陸軍にも、炭を納入していたという。

ところが、昭和二十年、祖父の貴久雄が四十四歳で死亡し、商売も成り立たなくなってしまうため、水窪から浜松方面へ移り住むこととなった。

父は、浜松一中（浜松北高）へ下宿しながら通っていたが、戦局が進むにつれて、学徒動員で浜名郡の新居にあった中島飛行機の工場で働き、四年で繰り上げ卒業ということになった。そんな時に、祖父が死んだのである。

遺された祖母は当時三五歳、長男である父は十七歳、ほかに兄弟が五人いた。祖母はよく言ったものだ。「おれは三十五歳のこの時から男になったんだ。」

父は水窪小学校の代用教員になったが、月給で電球が一個しか買えなかったという。そんな訳で教員をやめ、祖母と二人で行商を始めたという。終戦の混乱期、「かつぎ屋」というのか豊橋から浜松方面をめぐつたらしい。日本国民は皆、食うのに精一杯であった時代であった。

戦後、水窪の家を残したまま、浜北町小松に家を借り、八百屋を始めた。父は、水窪と小松の間を自転車で رفتり来たりしたという。現在、自動車でさえ二時間はかかる山道である。昔の人はよく遠い道を歩いたものだ。

やがて、浜北町根堅の国有地が、開墾すれば、払い下げられることを知り、そこに粗末な家を建て、一家が住むこととなった。父・雄一郎は浜北町小林の「北栄サイジング工場」に職を得、運転手として入ったが、やがて現場作業員となり、そして事務職となり、ついには事務長となった。そして、私が中学二年の時、独立して、浜松市西島町（現在の南区）に「富永サイジング株式会社」を設立した。「サイジング」とは、「機械糊付け業」のことで、織物工場の手前の一工程である。

紡績↓荒巻↓サイジング↓織布↓加工（糊を落とす、染色、晒さらし）↓製品（ワイシャツ等）。

昔は「ガチャ万」（ガチャと織れば、一万円の意）といわれた遠州織物の全盛期、浜松地方には多くの織維商社、織物工場、加工場があった。今は、遠州産地も新興国に押され、すっかり衰退してしまっ

た時期でもある。父は、昭和五十四年四月、浜松市議会議員に立候補して、初当選。一期つとめた。いちばん輝いていた時期でもある。

その後、需要の悪化による業績不振で、サイジング業は廃業した。

私は大学卒業後、父の立候補と入れ替わるようにして、家業のサイジングに入社したが、思うところあって、その秋に浜松を出奔し、京都に行った。父は落胆したかもしれないが、私には若気のいたりもあつたのだろうか。

京都にアパートを借り、アルバイトの生活を始めた。根無し草の生活である。

恩師の林誠宏先生は、そんな私の生活をみて、心配されたのだった。

「富永君、浜松に帰って、教師にならないか。」

中学教師になって、あとから先生に聞くと、私の家族・母と祖母が来たとき、「何とか、公文を浜松に返すようにお願いします。」と頼んだらしい。

教職課程はおおかたとっていたのだが、教員免許をもらうには、あと数単位足りない。教育実習と教職日本史を受講しなければならない。

翌年の昭和五十五年、私は母校・立命館大学の「聴講生」となった。教育実習は、出身の浜松の東部中で行った。教職日本史は「南北朝なんぼくちゆうせう正閏論せいんろん」がテーマであり、わかりやすかった。

歴史学と現場教育の関係が、政治に左右されることがよくわかったのだ。

幸運にも教員採用試験にも合格し、実質二浪で教師になることができた。これもあれも林先生のご助言とご指導によるものである。

父の記

— 実録・富永雄一郎伝 —

彼、富永雄一郎は、昭和三年七月二十六日、静岡県旧周智郡（後・磐田郡）奥山村（水窪町奥領家・通称、水窪本町）の椎茸や炭を扱う小さな商家に生まれた。父の父、（筆者の祖父）の名は、富永貴久雄（明治三十四年十一月二十六日生）昭和二十年一月二日、享年四十四歳没）、祖父は、浜松商業高等学校に学んでいる。

この山家（山奥）の水窪町は「秋葉街道・信州街道」沿いに発達した宿場町で、すぐ北は青崩峠や、兵越峠をまたげば、長野県下伊那郡南信濃村（最近市町村合併により、飯田市）長野県最南端である。

山間地の町、現在ではJR飯田線、水窪駅があるが、（水窪駅は、近年作られた駅である。飯田線は、天竜川の佐久間ダム建設により昭和の戦後期に飯田線はもともと、天竜川筋にそって直線的に走っていたのだが、現在の水窪駅は水窪トンネルを建設して、迂回されてできているものだ。）

さて、青崩峠が古来より遠州と信濃を結ぶ交通路の国境であり、遠信（遠江・信濃）（静岡県・長野県）この信州街道（秋葉街道）、しいていえば、その道の名は「ソルトロード」（塩の道）・「シルクロード」（絹の道）、である。

武田信玄が元龜三年徳川家康と三方ヶ原の合戦のため二万五千の兵を率いて、南下したのもこの道であることは、有名な話である。現在、三遠南信（東三河・遠州・南信濃）道路計画により、トンネルと高規格道路の建設が始まって、建設は進んできている。

この道は、南北中部日本を結ぶ重要な道であり、水窪町は遠州側の重要な宿場町であり、現在で言うところのサービスエリア（道の駅）であった。

彼、雄一郎の追想によれば、生まれた家のすぐそばには遊郭があり、彼と同年ぐらいの少女が、遊女に売られてきて、その様子を見、悲しい思いをした、という。彼の初恋は意外と、その辺にあったのかもしれない。昔、水窪町全体の人口八〇〇〇人ほどあったらしい。昨今は、過疎化が進み、浜松市天竜区になり、市町村合併後の旧水窪町の人口は、三〇〇〇人ほどに激減している（二〇〇八年・平成二十年浜松市人口統計）という。

古来より、信州街道（秋葉街道）は、信濃から遠州へ、紙や絹糸が運ばれ、遠州から信濃へは、塩や塩鯖などの水産物など、また信濃の絹糸の紡績工場で働く女工さんたちが、この水窪町の宿場で険しい青崩峠・兵越峠の遠信国境を前に、宿泊・休憩した宿が多かった宿場町でもあった。当然、商業・流通業も発展し、かつては遊郭も何軒もあった。（『ああ野麦峠』の世界であるか）

さて、喜久雄の妻、私の祖母の名は「ひろ」、旧姓は長谷川氏。この長谷川も、もとは「富永」姓であったらしい。これは、祖母から聞いている。

当家の本家は、佐久間町城西（平成の市町村合併により、現浜松市天竜区佐久間町城西、JR飯田線城西駅のすぐ近くにある。当家では、この本家のことを「大家」と呼んでいる。

城西地区は水窪町と町界をへだてて隣り合っている。奥領家の南となる。以前（むかしのことだが）、佐久間町城西村と水窪町の境界設定のとき、城西村が佐久間町と水窪町のどちらに編入されるのか、議論になったとき、城西の人たちは佐久間町への合併を望み、現状のようになったという。

しかし、現在は、佐久間町も水窪町も過疎化・住民の高齢化が進み、政令指定都市浜松市天竜区の一

町にすぎない。

富永雄一郎は水窪高等小学校を卒業し、浜松第一中学校（現・浜松北高等学校）に合格。水窪から来浜して、遠い親戚にあたる浜松の学校近くの家に下宿し、一中に通った。

そのころの苦労話は、別掲の自伝にくわしい。

——子どもと親——

富永 雄一郎

中学生ともなりますと、すくすくと身も心も共に成長するのに驚くばかりです。

「お母さんと並んでござらんよ。」母と子ども達二人、それにおばあちゃんまでが、一列に並んで、子ども達のたくましく高くなつた姿を見て成長をよるこぶのは、子を持つ親の嬉しさであり、欣（よろこ）びでもあります。

時代の背景は、がらつと違つた戦中の環境の中に育つた私達の中学生時代、私事で恐縮ですが、私の父は今で云（い）う処の、「教育」の二字に熱心すぎた「教育オヤジ」だったように思われた。家が忙しい商家だからと云う理由も有つたが、私は親戚の弁護士の家庭に、しつくと勉強の向上を目的に父の考えで、お世話になつたが、きびしい私の中学生時代であつた。

その家庭の云いつけ通り毎日の日課は、朝早くから、お庭のお掃除、お部屋のお掃除、毎日畳と畳の目のお掃除、亦（また）弁護士先生の出勤時には、靴をみがくこと等、今の私が考えただけでも、時代の精神力の影響とは云うものの、少しばかり厳し過ぎたし、よくも自分乍（なが）らやり抜けた